若越郷土研究　四十七巻二号

『蓮如上人いろは歌』五種

阿部法夫

本願寺の第八代法主であり、真宗中興の上人といわれた、蓮如上人がお作りになったといわれている「いろは歌」をまとめたものが、これまでの調査で幾つか見つかりました。

『真宗史料集成』には、蓮如上人に擬托・仮託したものが殆どであるとして「蓮如上人以呂波歌」は収録されていません。しかし、そのような史料が出てくる時代的・社会的背景を考えることも必要であろうかと考えます。そのため、このような唱導史料を発掘していき、今後の真宗史特に真宗思想史研究発展の一助となればと思います。

解　説

まず、蓮如上人四五〇回忌（昭和二十三年正当、二十四年執行）記念の出版物であったものからみていきます。

①『**蓮如上人御作いろは歌**』一枚物、三方郡八村鳥濱、浄蓮寺門徒、加藤仁右衛門編。

昭和二十三・四年ごろの発行で、この書の跋には、

以上四十七首のいろは歌は、文明年中赤尾の道宗のために、よませたまふとなん。越前吉崎の法雲寺に、この御眞筆ありと傳ふ

という解説文が付いています。この文中に「法雲寺」と記されていますが、これは「法栄寺」の誤記かと思われます。法栄寺は現在廃寺で、北海道に移転しているようですが、大谷大学教授の故多屋頼俊師のお寺であります。また、法雲寺であれば、吉崎の地名は「越廼村大味」でなくてはならないのでしょう。

②『**蓮如上人奉賛**』小冊子（六十一頁）、金沢市長土塀、超雲寺住職、清原公潁著。

昭和二十七年四月発行で、いろは歌はこの本の七～五十頁に載っています。歌の解説・法語とともに全四十七首を紹介し、巻末には蓮如上人略伝を付す。超雲寺での蓮師御遠忌執行の記念誌という所でしょうか。著者の清原師は次のように言うが、なぜか出典を記していない。

いろは歌を拝読すれば、どの殆んど全部が信心を示し、而もその教導の方法が柔美である点が特に有難く感ぜられるのである。（中略）上人の「なからんあとのかたみ」として刊行したのである

③『**蓮如上人いろは歌**』小冊子（二十七頁）、滋賀県東浅井郡湖北町、明善寺前住職、中沢南水著。

昭和四十二年発行で、この書の三～十二頁にいろは歌四十八首（実数六十首余り、御文の中からも収録したとの事）が載る。中沢南水師は、在野の学究肌の真宗史学者で、『長浜御坊三百年誌』などの著書があります。著者は次のように述べる。

古来、蓮如上人のいろは歌が、加賀地方に伝承されています。一般に知られていないようですが、（中略）羽咋の本念寺角力といい、国府津真楽寺能楽といい中祖のお意（こころ）は「心のつまるものかと思へば信心に御なぐさめられ候」にあったようです。

さて、時代は少し遡りますが、大正時代発行の次の書も入手できました。蓮如上人四〇〇回忌（明治三十一年執行）の記念と思われるものです。

④『**蓮如聖人御詠歌**』小冊子（十一丁）、金沢市野田寺町、横野清七編。

大正十二年発行のもので、蓮如上人のいろは歌を中心に、達如上人などの歌を合わせて、五十首余りの歌が収録されています。この書の中ほどに次のような解説があります。

蓮如聖人　御領解イロハ御詠歌　常州　西保末村（さいほすえむら）　大綱（おおつな）九右衛門江譲書有レ之、是レヲ披見シ書キ寫ス者ナリ、正行寺寶物　信證院　蓮如聖人御正筆之寫ナリ。

最後に、更に時代は遡りまして、江戸時代の著書を紹介します。

⑤『**蓮如上人御隠棲実記**』西生伯恕編、止斎老人増補、文政二（一八一九）年刊行。

「真宗全書」の第六七巻に所収されるもので、この書の巻末に付載として収録されていました。この書『蓮如上人御隠棲実記』は、滋賀県湖東にある日野町近辺の蓮如関係寺院の旧記を集めて、寛正六年から文明元年までの数年間の蓮如上人の実績を詳細に調べあげたもので、いわば、蓮如上人御旧跡寺院縁起・案内書です。それを裏付けるかのように、文政より四十年程あとの安政二年（一八五五）の後刻にあたり『**蓮如上人遺跡図繪**』と書名を改めています。

いろは歌の前文に曰く、

上人当国御化導の時、イロハ四十八字より億数迄、是を頭字とし、安心起行を述て、愚痴の輩に書て、与え給ふ。元は御真筆のものありと伝へり。今はいにしへうつし伝へしもの。三河国旧家にありて。

この書の特徴は、イロハ歌四十八首の他に、「一」から「億」までの数字を読み込んだ歌も収録されていることです。こうした数字を読み込んだ歌は、「**弘法大師十無益**」の歌や、「**達磨大師十種無益歌**」にも相通ずる考え方であり、蓮如上人の創作とは言い難い所も見受けられます。

凡　例

※①～⑤の各書から記載されている（別歌も含めて）全てのいろは歌を採用しましたが、福井県人がものにしたという理由で、①の書『蓮如上人御作いろは歌』を冒頭に掲げました。

※①の歌と②の歌・③の歌はほぼ同様のものです。③および④の書には、別歌として相当数収録されています。〇番号に「本・別」の記号を付して区別しています。説明すると、

「③本」…③の書『蓮如上人いろは歌』では、本歌として挙げられている。

「④別」…④の書『蓮如聖人御詠歌』では、別歌として挙げられている。

なお、③および④の書からの引用において、本歌・別歌の順を入れ替え、なるべく同種の歌が並ぶようにしています。

※⑤の書『蓮如上人御隠棲實記』に収録されているいろは歌は、全く別系統のものです。

※④の書『蓮如聖人御詠歌』および⑤の書『蓮

如上人御隠棲實記』収録の歌は、カタ仮名表記ですが、ひら仮名に直しています。また、各歌の振り仮名は原書の表記通りです。なお、（　）で歌の理解を助けるために、漢字を付しております。また、傍点は筆者が加えたものです。

い

①…いくたびも　聞くにあかぬは　法のみち
　　そむればいづる　しんじんの色。

②…いく度も　聞くに飽かぬは　法の道
　　染むれば出づる　信心の色。

③別…幾度も　きくにあかぬは　法の道
　　そむればいづる　信心の色。

③本…一念に　帰命の花の　開きては
　　あなたまかせの　身にぞありける。

④…いつまても　他力の信を　ゑ（得）ぬうちは
　　こゝろさたまる（定）　ことはなきなり。

⑤…いままでは　六趣の内に　たゝよひて（漂）
　　ついに生死の　二字を離れず。

ろ

①…ろく道に　ひく業障の　つなをきる
　　つるぎなりけり　みだの名号。

②…六道に　ひく業障の　綱をきる
　　剣なりけり　弥陀の名号。

③…六道に　ひく業障の　綱を切る
　　剣なりけり　弥陀の名号。

④…ろんごよみ　論語よますと　いふぞかし
　　われとしらるゝ　信にあらねば。

⑤…ろめい程（露命）　たのみ少なき　物はなし
　　いつか無常の　風にきへなん。

は

①…はづかしと　とはであやまる　法のみち
　　ふみまよふべき　人ぞはかなし。

②…恥かしと　問はであやまる　法の道
　　踏み迷ふべき　人ぞはかなき。

③…はづかしと　問はで誤る　法の道
　　ふみ迷ふべき　人ぞはかなき。

④…はなは根に　鳥は古巣に　かへるなり
　　帰命の二字の　わけをたつねよ。

⑤…はかなきは　夢のうき世に　有りながら
　　後世を知らざる　人ぞまよへる。

に

①…にせものは　かはり安きに　かはらぬは
　　まことの信の　しるしなりけり。

②…にせ物は　かはりやすきに　かはらぬは
　　實の信の　しるしなりけり。

③…にせものは　変り易きに　変らぬは
　　真の信の　しるしなりけり。

④本…にたことは　似ても他力の　手びきなき
　　念仏は自力　あさましきかな。

④別…人間に　たづねてしれぬ　後生道
　　とかく他力は　ひとにたづねよ。

⑤…にんげんの　あだなる事を　たとふれば
　　沢辺の螢　宵の稲妻。

ほ

①…ほのぐゝと　こゝろにうかぶ　称名の
　　ほかよりふかき　しん心もなし。

②…ほのぐゝと　心に浮む　称名の
　　外には深き　信心もなし。

③…ほのぼのと　心に浮ぶ　称名の
　　外には深き　信心もなし。

④本…ほん願の　道おしゑ顔　する人は
　　他力の他力　しらぬはかなさ。

④別…法義者と　智者と学者は　多けれど
　　他力領解の　ひとはまれなり。

⑤…ほどをへて　参る浄土と　思ふなよ
　　た、一念の　うちに生るゝ。

へ

①…へいぜいに　ほとけの恩を　むねにえて
　　ほかにまつべき　来迎もなし。
②…平生に　仏の恩を　むねに得て
　　外にまつべき　来迎もなし。
③…平生に　仏の恩を　胸に得て
　　外に待つべき　来迎もなし。
④…へいせいに　人を勧化の　坊主だち
　　口とこゝろを　おもひあはせよ。
⑤…へたてある　地獄極楽　しりながら
　　おどろかぬこそ　おろかなりけり。

と

①…となふれば　うらみくやみの　雲はれて
　　むねにはのこる　しん心の月。
②…称ふれば　恨み悔みの　雲晴れて
　　胸には残る　信心の月。
③…称ふれば　恨みくやみの　雲はれて
　　胸には残る　信心の月。
④…とふてこそ　とわてしるべき　ことはなし
　　とはゝおしへに　したかひてこそ。
⑤…ともすれば　けだいがちなる　此身かな
　　よしなき事に　ひまを取れて。

ち

①…ちしきより　迷のやみの　手をひかれ
　　いまはかがやく　花にこそすめ。
②…知識より　迷の闇の　手を引かれ
　　今はかゞやく　花にこそ住め。
③…知識より　迷の暗に　手を引かれ
　　今に輝く　花にこそ住め。
④…ちしきには　逢がたきなり　なにゆへに
　　我はからひの　やまぬうちには。
⑤…ちゑなくば　いそぎて願へ　極楽を
　　弥陀の誓ひに　いつはりはなし。

り

①…りこんなる　人をうらやむ　心こそ
　　弥陀のちかひを　しらぬゆゑ也。
②…利根なる　人を羨む　こゝろこそ
　　弥陀の誓を　知らぬ故なり。
③…利巧なる　人を羨む　心こそ
　　弥陀の誓を　知らぬ故なれ。
④…りんしゅは（臨終）　信決定の（しんけつじょう）　場所なれは（ばしょ）
　　正定聚にぞ（しょうじゅ）　入れたまひけり（い）。
（理）
⑤…りを知らぬ　人こそまよへ　兎も角も
　　心のくらき　闇にひかれて。

ぬ

①…ぬれてほす（濡）　たもとはのりの　涙にて
　　ほとけの恩を　しる人ぞしる。
②…ぬれてほす（干）　袂は法の　涙にて
　　仏の恩を　知る人ぞ知る。
③…ぬれてほす　袂は法の　涙にて
　　仏の恩を　知る人ぞ知る。
④…ぬらさしと　人目しのべと（ひとめ）　しのひかね
　　ぬるゝは他力（たりき）　かはくそらしん。（信）
⑤…ぬす人は　心の内に　たへやらず
　　得たる信心　うばひとられな。

る

①…るてんして　またあひがたき　みのり也
　　をろそかにきく　人ぞかなしき。
②…流転して　また逢ひ難き　御法なり
　　おろそかに聞く　人ぞかなしき。
③…流転して　又あひ難き　み法なり

疎かに聞く　人ぞかなしき。

（類）

④…るゐもなき　おしゑなりけり　さてこそは
　祖師相傳の　信をとるなり。

⑤…るてんする　その源を　聞時は
　たゞうたかひの　心にひかれて。

を

①…をひぬれば　心かたちも　よはりゆく
　後世のねがひも　わかきうち也。

②…老ぬれば　心かたちも　よはりゆく
　後世の願ひも　わかきうちなり。

③…老いぬれば　心形も　弱りゆく
　後世の願ひも　若きうちなり。

④…をのづから　我をはなれて　みどり子に
　なりてをしへに　まかせみな人。

⑤…おそろしや　我信心を　とらんとて
　参り下向に　さまたけをする。

わ

①…わが身をば　いたづらものと　思ふべし
　よしとおもへば　自力なりけり。

②…我身をば　徒らものと　思ふべし
　よしとおもへば　自力なりけり。

③本…我身をば　徒ら者と　思ふべし
　よしと思へば　自力なりけり。

③別…われ知らず　南無阿弥陀仏の　浮みしは
　五劫思惟の　弥陀の計らひ。

④…われながら　覚語定て　口にたゞ
　まふす念仏を　自力とぞいふ。

⑤…わか身さへ　皆かりものと　聞時は
　扨其外に　何か我もの。

か

①…かゝる身を　たすけたまふの　嬉しさを
　つねにおもふを　憶ねんといふ。

②…かゝる身を　助けたまふの　嬉しさを
　常におもふを　憶念といふ。

③…かかる身を　助け玉ふ　嬉しさを
　常に思ふを　憶念といふ。

④本…かしこくて　とる信心に　あらざれば
　祖師も愚痴にぞ　かへりたまひし。

⑤…かりそめに　地獄の門に　入ならば
　出る期もなく　くるしみの宿。

よ

①…よしあしの　こゝろにつけて　念仏の
　くちにたへぬを　相続といふ。

②…よしあしの　心につけて　念仏の
　口に絶えぬを　相続といふ。

③…よしあしの　心につけて　念仏の
　口にたえぬを　相続といふ。

④…よき人の　手びきに逢ぬ　人はただ
　無宿善なり　是非もなきなり。

⑤…よも捨ず　いとなむ業も　なしながら
　行住坐臥に　申せ念仏。

た

①…たのむ機を　我機とむかし　迷ひけり
　他力になれば　わがものはなし。

②…たのむ機を　我が機と昔し　迷ひけり
　他力になれば　我がものはなし。

③…たのむ機を　わが機と昔　思ひけり
　他力となれば　わがものはなし。

④…たのめよと　あるとばかりに　聞なして
　頼むわけをは　しらぬはかなさ。

⑤…たつねても　よき同行に　ちかつきて
　弥陀の御恩を　ともに悦べ。

れ

①…れんげ座に　のりうるまでは　唱えつゝ
　ほとけの恩を　ふかく報ぜよ。

②…蓮華座に　乗り得るまでは　称へつゝ
　仏の恩を　深く報ぜよ。

③…蓮華には　死してのるぞと　思ひしに

（臺）

一念南無の　花のうてなに。
④…れき〳〵の　坊主たちより　愚痴無智に
いやしき人ぞ　信をとるなり。
⑤…れき〳〵の　其古の　智者達も
弥陀を頼て　往生ときく。

そ

①…そしるまじ　たとひとがある　人なりと
我あやまりは　それにまされり。
②…そしるまじ　たとひとがある　人なりと
我があやまりは　それにまされり。
③…そしるまじ　仮令とがある　人なりと
わが誤りは　それにまされり。
④…祖師よりも　御相傳なる　たりきしん
ゑがたきことは　我こゝろから。
⑤…その外は　少の智慧か　有とても
自身捨ずは　さとり得がたく。

つ

①…つみとがの　うすくなるとは　覚へねど
仏のおんぞ　ふかくしらるゝ。
②…つみとがの　薄くなるとは　覚へねど
仏の恩ぞ　深く知らるゝ。
③…包むとも　その言の葉は　色にいで
南無阿弥陀仏と　称へこそすれ。
④…つゝみても　ふかくつゝめよ　内心に
とりたる信を　人にとられるな。
⑤…つきせぬは　聖道門の　修行なり
末世の衆生　いかて勤めん。

ね

①…ねん仏の　かずにはよらぬ　信なれど
信にはかずの　おほきねん仏。
②…念仏の　数にはよらぬ　信なれど
信には数の　多き念仏。
③…念仏の　数にはよらぬ　信なれど
信には数の　多き念仏。
④…ねんころに　きけとは他力　信をゑし
人にたづねの　おふせなりけり。
⑤…ねざめにも　弥陀の御恩を　忘れすに
聲打あけて　申せ念仏。

な

①…なむの二字　十八願の　かなめなり
たのむこゝろを　賜りにけり。
②…南無の二字　十八願の　かなめなり
たのむこゝろを　賜りにけり。
③…南無の二字　十八願の　要なり
たのむ心を　賜りにけり。
④…なむの二字　たのむわけを　聞わけて
たのみゑし身は　手がらなりけり。
⑤…ながき世の　明るもしらで　ねる人は
後は地ごくの　あるじとぞなる。

ら

①…らくの土を　むかしはいそぐ　心なし
いまはたのしむ　信心のはな。
②…楽の土を　昔はいそぐ　こゝろなし
今はたのしむ　信心の花。
③…楽の土を　昔は急ぐ　心なし
今は楽しむ　信心の花。
④…らいせとは　遠きことよと　すておかば
無常の風を　とめてみよかし。
⑤…らくうけて　命を長く　望みなば
願ふて参れ　弥陀の浄土へ。

む

①…むつまじき　人のひろめる　教には
かならずそれに　うつる世の中。
②…睦じき　人のひがめる　教には
かならずそれに　うつる世の中。
③…睦まじき　人のひがめる　教には
必ずそれに　うつる世の中。

（無始）
④…むしよりも　迷ひなじみの　この世ゆへ
　ひける業障　さるこゝろなし。
⑤…むかしこそ　今末法の　末の世に
　我と悟りを　得る人ぞなき。

う

①…うきことを　よろこぶ信も　あるものを
　いのりごゝろを　やめよみな人。
②…憂きことを　喜ぶ信も　あるものを
　祈りごゝろを　やめよ皆人。
③本…憂き事を　喜ぶ信も　あるものを
　祈り心を　やめよ皆人。
③別…嬉しさを　昔は袖に　包みけり
　今宵は身にも　余りぬるかな。〔古今集〕
③別…浮気では　靡かぬ弥陀の　振袖よ
　命ぐるみに　ほれこんでみよ。〔等正寺〕
④別…うわきては　なびかぬ弥陀の　ふり袖よ
　命くるめに　ほれこんてみよ。
④本…うかむ世の　なきこの身なり　たゝふかく
　弥陀の御袖に　ひしとすかれよ。
⑤…うたかひは　浄土参りの　さまたげよ
　いわじ語らじ　心ゆるすな。

ゐ

①…ゐまはしと　おもふ心は　おのづから
　穢土をいとはぬ　しるしなりけり。
②…忌まはしと　思ふこゝろは　おのづから
　穢土を厭はぬ　しるしなりけり。
③…忌まはしと　思ふ心は　自から
　穢土を厭はぬ　しるしなりけり。
④本…ゐち念に　一期一度　たのみゐて
　まふす念仏を　報謝とそいふ。
④別…一大事　たった一度の　一大事
　しる人あらば　尋ねたいもの。
⑤…いたつらに　あたに月日を　送る人
　地獄ならでは　行かたもなく

の

①…のちの世を　願ふこゝろの　ふかければ
　この世の罪も　うすくなるべし。
②…後の世を　願ふこゝろの　深ければ
　この世の罪も　うすくなるべし。
③別…後の世を　願ふ心の　深ければ
　此の世の罪も　うすくなるべし。
③本…野の末や　山の奥にて　果つるとも
　不可思議光の　内にあらずや。
③別…法を聞く　道に心の　定まれば
　南無阿弥陀仏と　称へこそすれ。
④…のちといひ　捨をきかたき　身なりけり
　出入いきを　またぬ世なれば。
⑤…のちの世を　願ふ人こそ　かしこけれ
　此世は夢の　たわむれのやど。

お

①…おのづから　口にうかむも　楽しむも
　わが機そはねば　みな他力なり。
②…自から　口に浮むも　たしなむも
　我が機そはねば　みな他力なり。
③…自から　口に浮ぶも　嗜むも
　わが機そはねば　皆他力なり。
（恩賜）
④…おんしひと　口にはいへと　こゝろへの
　わけなき身こそ　かなしかりけり。
（音）
⑤…をともせじ　聲も立じに　来るこそ
　無常の風の　つかひ成けり。

く

①…くもるとも　くらくはあらじ　みだ頼む
　人はかゞやく　むねの月かけ。
②…くもるとも　暗くはあらじ　弥陀たのむ
　人はかゞやく　むねの月影。
③…曇るとも　暗くはあらじ　弥陀たのむ

人は輝く　胸の月影。
④本…くもりをは　我とはらせと　はれはせじ
　ちしきにあわは　はるゝ月かげ。
④別…観音は　頭に弥陀を　いたゞいて
　われたのまずと　弥陀をたのめよ。
⑤…くをはなれ　たのしみの身と　成たくは
　只弥陀仏を　頼め皆人。

や

①…やまひある　身に称名の　をこたらば
　つねのけだいは　思ひしらるゝ。
②…病ある　身に称名の　怠らば
　つねに懈怠は　思ひ知らるゝ。
③別…疾ある　身に称名の　怠りは
　常の懈怠ぞ　思ひ知らるる。
③本…山よりも　高きは親の　恩ときく
　仏の御恩　何と譬へむ。
④…やみ地をば　みちびく知識　なりにけり
　おしへをきゝて　信をとるべし。
⑤…やまの端に　月日のかげの　入を見て
　命をせむる　便とぞ知れ。

ま

①…まうねんの　おこるにつけて　唱ふれば
　妄念きへて　あとはねん仏。
②…妄念の　起るにつけて　称ふれば
　妄念消へて　あとは念仏。
③別…妄念の　起るにつけて　称ふれば
　妄念きえて　後は念仏。
③本…末代の　凡夫罪業の　われらには
　弥陀たのむより　外に道なし。
④本…まん心を　止てきくべし　なにことも
　知識まかせと　まかすしんしむ。
④別…圓めても　ただまるまらぬ　胸のうち
　とふぞ他力と　まるめたひもの。
⑤…まつ代の　凡夫往生　する事は
　弥陀願力の　つよきゆへなり。

け

①…けだいとは　まことのうすき　心ぞと
　悔るこゝろを　がいけとはいふ。
②…懈怠とは　まことの薄き　こゝろぞと
　悔ゆる心を　改悔とはいふ。
③本…懈怠とは　誠のうすき　心ぞと
　悔ゆる心を　改悔とぞいふ。
③別…化身とて　蓮華の上に　端座して
　無上覚をば　さとる身と聞く。
④…けしからぬ　おしへ成けり　うたがうな
　我とる信は　わかためとなる。
⑤…けだいなく　参り下向を　する人は
　人の中にも　上々の人。

ふ

①…ふしぎより　不思議と思ふ　心こそ
　弥陀のちかひの　至極なりけり。
②…不思議より　不思議と思ふ　こゝろこそ
　弥陀の誓の　至極なりけり。
③…不思議より　不思議と思ふ　心こそ
　弥陀の誓の　至極なりけり。
④…ふしぎより　得させたまへる　弥陀の信
　ゑかたきゑるぞ　不可思議のをん。
⑤…ふたつとも　ならぶる事の　あらはこそ
　南無阿弥陀仏の　六の外には。

こ

①…この度は　迷ひさとりの　わけめなり
　あつさ寒さも　いとふべきかな。
②…この度は　迷ひ悟りの　分け目なり
　暑さ寒さも　厭ふべきかは。
③…この度は　迷ひ証の　分目なり
　暑さ寒さも　厭ふべきかは。
④本…こゝこそは　弥陀の浄土　なることは
　他力信者の　身の外になし。
④別…恋しられ　ほれかへしつゝ　弥陀さまに

そへとげましゃうと　たのむ一念。
⑤…こしかたや　又行末を　あんずるに
愚痴と闇地に　迷ふ人なり。

え

①…え土ながら　こゝもはちすの　臺なり
弥陀たのむ身は　ねざめうれしき。
②…穢土ながら　こゝもはちすの　うてなり
弥陀たのむ身は　ねざめうれしき。
③本…得難きは　他力の信と　聞くものを
あらまほしきは　胸の信心。
③別…得てみれば　煩悩菩提　体無二と
仏智の証　ゆづりたまへば。
④…えんなくて　他力信は　とりがたし
たよりも　とめて　たづねあきらめ。
⑤…えきもなき　世間の事は　かたれども
御恩悦ふ　人ぞまれなり。

て

①…てら鐘を　法のすゝめと　思ひつゝ
きくにつけては　となふべき也。
②…寺鐘の　法の勧めと　思ひつゝ
聞くにつけても　称ふべきなり。
③本…寺の鐘　法の勧めと　思ひつつ
聞くにつけても　称ふべきなり。
③別…天は釈迦　地は弥陀仏の　慈悲の父母
衆生は子供　南無の一人子。
④…てんたふの（顛倒）心なからも　弥陀たのむ
こゝろはむなし　からぬちかひよ。
⑤…てにたすも（手）足にはこぶも　身にふるも
思ふもいふも（言）くるしみの宿。

あ

①…あさましと　思ひながらも　妄念の
やまぬにつけて　たふとかりけり。
②…あさましと　思ひながらも　妄念の
やまぬにつけて　尊とかりけり。
③本…浅ましと　思ひながらも　妄念の
起るにつけて　尊とかりけり。
③別…朝夕に　なる寺々の　鐘太鼓
他力の信を　得よといふなり。
④…あさましき　いたつら者と　思ひつめ
たゞよき人に　身をばまかせよ。
⑤…ありかたや　弥陀頼む身に　成たれは
南無阿弥陀仏と　唱へこそすれ。

さ

①…さだめなき　浮世の中に　定まるは
弥陀たのむ身の　さとり也けり。
②…定めなき　浮世の中に　定まるは
弥陀たのむ身の　悟なりけり。
③本…定めなき　浮世の中に　定まるは
弥陀たのむ身の　証なりけり。
③別…幸に　渡りに舟の　ご本願
思へば深き　恵なりけり。
④…さま〳〵に　迷心は　おうけなき
無縁の行者　いゝかひもなき。
⑤…さきたつも　跡に残るも　とゞまらず
有為転変の　夢の世の中。

き

①…きも法も　なむあみだ仏の　うちにあり
わが機をそふる　人ぞあやうき。
②…機も法も　南無阿弥陀仏の　うちにあり
我機を添ふる　人ぞ危うき。
③本…機も法も　南無阿弥陀仏の　中にあり
我機をそふる　人ぞ危ふき。
③別…聞きえては　仏も我も　なかりけり
南無阿弥陀仏と　現われにけり。
④…きのどくや　他力のわけは　しりもせて

他力とおもふ　自力こんしゃう（根性）。
⑤…きのふまで　言葉をかはす　同行も
　けふ尋れは　なき人の数。

ゆ

①…ゆめにだに　仏を拝む　こゝろこそ
　ごびに忘れぬ　人といふべし。
②…ゆめにだに　仏を拝む　こゝろこそ
　寤寐に忘れぬ　人といふべき。
③…夢にだに　仏を拝む　心こそ
　寤寐に忘れぬ　身とぞ知らるる。
④…ゆめの世と　口にはいへと（言）　こゝろには
　おもはぬゆへに（故）　たのむ信なし。
⑤…ゆめの世に　露の命を　持ながら（歳）
　我身有けに　おくるとし月。

め

①…めぐめたゞ　人あしかれば　なにはがた
　我身にとがの　かへるしらなみ。
②…恵めたゞ　人あしかれと　難波潟
　我身にとがの　返る白浪。
③…恵めただ　人あしければ　浪花潟
　我身に咎の　かへる白浪。
④…めん〳〵に　我こゝろから　定めをき
　他力といふぞ　おかしかりけり。
⑤…めくり来て　希なる法に　あふことは
　ふたつともなき　生の仕合。

み

①…みのとがは　くゐてもやまぬ　身なれども
　悔る心を　ゝこすべきなり。
②…身の咎は　悔いてもやまぬ　身なれども
　悔ゆる心を　起すべきなり。
③本…身の咎は　悔ゆとも尽きぬ　身なれども
　悔ゆる心を　起せ皆人。
③別…弥陀の名を　聞きうる事の　あるならば
　南無阿弥陀仏と　たのめ皆人。
④…みたはたゝ（弥陀）　頼む心を　まちたまふ
　たのまぬ人は　たすけたまはぬ。
⑤…みな人の　我は得たりと　語るこそ
　やかて聞得ぬ　しるし成けり。

し

①…しらずとも　知るに同じと　あやまりて
　おしへをきかぬ　人ぞかなしき。
②…知らずとも　知るに同じと　あやまりて
　教を聞かぬ　人ぞ悲しき。
③本…知らずとも　知るに同じと　誤りて
　教を聞かぬ　人ぞはかなき。
③別…四十八　どれに劣りは　なけれども
　十七・八が　弥陀の振袖。
④別…四十八　どれにおろかは　なけれども
　十七・八は　弥陀のふりそで。
④本…しんしむの（信心）　おこるは弥陀の　御しひぞと（慈悲）
　きけとわけ問　こころなきかな。
⑤…しむを得て　御恩よろこぶ　人はみな
　浄土参りに　うたかひはなし。

ゑ

①…ゑがたきは　他力の信と　きくものを
　たふとむべきは　むねのしん心。
②…得難きは　他力の信と　聞くものを
　尊とむべきは　胸の信心。
③…穢土ながら　ここも蓮の　台なり
　弥陀たのむ身は　ねざめ嬉しき。
④…ゑかうとは（廻向）　弥陀と衆生と　一躰に
　なりかたまりの　おしへなりけり。
⑤…ゑもしらぬ　くせ法門を　いふ人は

無上の法を　けがすなりけり。

ひ

①…ひとごとに　くせをば笑ふ　世の中に
　うらやむべきは　念仏のくせ。
②…人毎に　癖をば笑ふ　世の中に
　羨むべきは　念仏の癖。
③本…人毎に　癖をば笑ふ　世の中に
　羨むべきは　念仏の声。
③別…一度も　仏をたのむ　心こそ
　真の法に　叶ふ道なれ。
③別…一人来て　一人で帰る　道なれど
　来るも帰るも　弥陀の先達。
④…ひし〳〵と　弥陀にすがれの　ひし〳〵に
　こゝろをつけよ　工夫あれかし。
⑤…ひたすらに　たすけ給へと　頼みては
　ひとりことにも　申せ念仏。

も

①…もらさじと　廣きちかひの　あればとて
　たくみてつくる　罪はゆるさず。
②…もらさじと　広き誓の　あればとて
　たくみて作る　罪はゆるさじ。
③本…漏らさじと　広き誓の　あればとて
　巧みて造る　罪は許さじ。
③別…若しやもし　疑ふ人の　あればとて
　洹沙の諸仏　護念証誠。
④…もろ〳〵の　雑業雑修　すてはて、
　弥陀をたのめの　おしゑなりけり。
⑤…ものしりも　物を知らぬも　おしなめて
　たすけ給ふは　弥陀の御力。

せ

①…せい願の　不思議ならずは　いかにして
　疑ひはるゝ　身とはなるべき。
②…誓願の　不思議ならずば　如何にして
　疑晴るゝ　身とはなるべき。
③…誓願の　不思議ならずば　いかにして
　疑はるる　身とはなるべき。
④…せん知識（善）　なくていかてか　とらるべき
　他力（信心）といふは　弥陀のしんしむ。
⑤…せつしゆ（摂取）して　捨給はぬと　聞時は
　我往生に　うたがひはなし。

す

①…すゑの世の　法のおしへの　いろは歌
　なからんあとの　かたみともなれ。
②…末の世の　法の教の　いろは歌
　なからんあとの　かたみともなれ。
③本…末の世の　法の教の　いろは歌
　なからむ後の　形見ともなれ。
③別…すぎ行くに　浮ぶに任せ　身の程を
　笑ひ玉はぬ　ことのはづかし。
④…すぐさまに　まかすこゝろの　うちにこそ
　いらせたまはる　弥陀の信心。
⑤…すみやかに　信の報謝を　聞分て
　よろこぶ人は　仏なるらん。

京

③本…今日ばかり　思ふ心を　忘るなよ
　さらではいとど　望み多きに。
③別…慶喜より　よむ言の葉を　後の世に
　わらはばわらへ　われあらめやも。
④…京よりは　我をはなれて　善悪も
　とんとはなれて　とれや信心。
⑤…京田舎　吾妻のはてに　住人も
　此信心に　かはることなし。

※以下、⑤の書『**蓮如上人御隠棲實記**』のみに記載されているものです。

一…一期とて　生れてからに　死ぬるまで

阿部　『蓮如上人いろは歌』五種

是も思へは　夢の世の中。
二…二世までと　契りこめしも　先達て
　　（化野）
　けふあたしの、　煙りとぞなる。
三…三世とは　過去と現在　未来なる
　弥陀の浄土は　尽ぬたのしみ。
　　（死）
四…四の縁は　無量にあると　聞時は
　臨終待な　兼てたしなめ。
五…五体をは　我物かとて　楽しまん
　魂を置　かりの入もの。
六…六道の　皆くるしみと　聞時は
　などや浮世を　いとはざらなん。
七…七宝の　たからを持て　有ぬとも
　後世を知らぬは　浅ましき哉。
八…八百万代　とはいへ共　夢の世の
　はかなき果を　知れよ皆人。
九…九重の　華を見るにも　忘るゝな
　いつか落行　人の身のうえ。
十…十悪を　此世に包み　かくせとも
　遂に地ごくの　人ぞかなしき。
　　（世）
百…百までと　生ぬ此代と　しりながら
　後世を思はぬ　人そかなしき。
千…千代万代と　寿くも　云ばかり
　尽ぬ目出度　弥陀の浄土は。
憶…憶々の　諸仏の浄土　清くとも
　参り安きは　弥陀の極楽。
以　上

伝承されてきた地域・時代は違っていても、これらの歌が蓮如上人御自身の作られたものかと思いますと、胸に有り難さが込み上げてきます。その一つ一つを味合わせて戴くと、蓮如上人の用意周到なおみちびきを感じ、蓮如上人に続くあまたの善知識の方々の、真摯な求道の精神を垣間見る事ができます。

私は「レンニョサン」と呼ばれる蓮如上人御影像道中という年中行事の中でお育てを受けてきました。そんな私が大きくなって、はからずも蓮如さんの作られた歌をこのような形で集めさせて戴くという不可思議なご縁を感じています。

さて、これ以外にも蓮如上人の作られた「いろは歌」は見つけることができると思います。いろは歌の収集はこれからも継続する予定ではありますが、ひとまずの区切りとして、五種類のいろは歌が集め終わった時点で発表することにしました。

なお、これ以外の蓮如上人製作のいろは歌をご存じの方がおられましたら、お知らせいただければ幸いです。